

# おすすめは「伊吹有喜」

## 図書館係 阿部健治

今年の本屋大賞は町田そのこの『52 ヘルツのクジラたち』に決まった。この作品は町田の初の長編小説であり、筆者も正直ノーマークだった。「本屋大賞」には「書店員による掘り出し物の発掘」という側面があり、そういう意味では最高の結果になったわけだが、ここ10年ほど「本屋大賞」のゆくえに注目し続けてきた筆者としては、未だ受賞していない、かつてのノミネートの常連作家たち（森見登美彦や万城目学や柚木麻子や、そして大ファンの原田マハなどなど……）のことを考えると、ちょっと複雑な気分にもなる。しかし、この賞は投票で決まるので、「日本全国の書店員が**最も読んでほしい**と思った本」という事実はやはり重いと思う。ということで、筆者は未読なのだが、まずはこれを薦めておく。

筆者がじっくり読んだもので、自信を持って薦められるのが、第3位にランクインした伊吹有喜の『**犬がいた季節**』だ。三重県の四日市市にある進学校「八稜高校」（通称ハチコウ）における、昭和63（1988）年度・平成3（1991）年度・平成6（1994）年度・平成9（1997）年度・平成11（1999）年度の5代にわたる卒業生を描いた連作小説で、その間、この学校では生徒会有志によって「コーシロー」という犬が飼われていた、だから「高校時代＝犬がいた季節」というわけだ。

この作品は他の小説と同じように、物語世界の外にいる作者の目からも描かれるのだが、時に犬であるコーシローの視点からも描かれる。犬であるコーシローは人間同士の異性を恋する匂いを嗅ぎ分けることができ、恋する思いは十二分にあるのに逡巡する人間たちをもどかしく思って、そのスリッパをくわえ、相手のところに持って行ったりする。もちろん、人間はコーシローの思いを理解することはできず、「全くもう」などと言うだけなのだが。この設定は実にうまいと思う。進路や恋や友人や家族などを巡って揺れ動く高校3年生たちの心がとても印象的に伝わってくる。筆者は職業柄「高校生を描いた小説」には特に注目しているが、それらの中でも間違いなく上位に位置する作品だと思う。

「高校生を描いた小説」の最高の作品は、筆者の中では、第2回（2005）本屋大賞受賞作である恩田陸の『夜のピクニック』である。高校生という特別な時期にあるが故にそれぞれが抱かざるを得ない不安や嫉妬。それらが絡み合っ、高校生の間には数々の「謎」が生じる。「疑惑」などというものに発展するものもある。そんな中で高校生活最大のイベント「歩行祭」が行われる。これは、朝から全校で歩き始め、その夜は途中の体育館に泊まり、翌日の昼頃にゴールするというものだ。こういう、**特別な時間、特別な空間をともに過ごすこと**によって、数々の謎が不思議に解けてくる（この様子が実に自然にリアルに描かれているのだ）。そういう経験を経て、自分とは違う仲間のそれぞれの思いを受け止めることができるようになる。成長とはこういうことだ、と思わせられる。2004 発表で少し古くなってしまったが、長く読み続けられるべき名作だと思う。

キュレーター（展覧会の企画をたてる人）の経験を生かした「アート小説」（ピカソを描いた『暗幕のゲルニカ』、ルソーを描いた『楽園のカンヴァス』など傑作が目白押し）で有名な原田マハには『でーれーガールズ』という作品がある。「でーれー」とは岡山弁で「すごい」という意味（「どえらい」という関西弁から出た言葉。名古屋では「どえりゃー」と言う。）。原田マハは父の仕事の都合で高校時代だけ岡山で過ごした。その経験を元にした作品で、1980年の女子高校生が実に生き生きと描かれている。40年前だから今とは全然違うこともあるが、とにかくエネルギーなのは同じで、「女子高校生」（の時代）とは本当に特権的なものなのだなと思う。暗い高校生時代（人生の中でも最低な時期だった！）を過ごした我が身には、ただただ羨ましいばかりである。

伊吹有喜の『犬がいた季節』には1990年代を通して見るという強い意志がありそうだ。伊吹にとっての1990年代とは20才代の10年だ。印象に残ることがたくさんあったのだろう。その時期に流行った歌やタレントのCMなどがふんだんに盛り込まれていて、5代にわたる高校3年生を眺めながら、時代の雰囲気も十分に感じ取れるという楽しみもある。1994年5月の天才レーサーアイルトン・セナの事故死、1995年1月の阪神淡路大震災、1995年3月の地下鉄サリン事件（すべて1994年度の出来事）なども盛り込まれていて、それが高校3年生に大きな影響を与えるところなど、実にうまく作られていると感心した。

伊吹は「**時の流れ**」ということに極めて鋭敏な作家だ。『犬がいた季節』の最初の卒業生である早瀬光司郎（彼の名がもとで犬が「コーシロー」になった）は歴代の美術部員で最もうまいと言われながら、東京芸大受験に失敗し、経済的な問題もあって地元に残った。これに対して、彼に淡い恋心を持つ塩見優花は是非とも地元に残ってほしいという家族の期待を十分に感じながら、結局は漠然とした「新しい世界（土地）」への憧れに突き動かされて東京の私大に行く。その優花は大学を卒業してから数年後、やはり自分は地元にいるべき人間だと気づいて帰郷し、母校の教員になるが、その時には店（パン屋さん）を継いだ兄は事業に失敗して店をたたみ、父は死に、母は回復の見込みのない病人になっていた。

伊吹はこういうすれ違いをよく描く。伊吹のデビュー作は『49日のレシピ』という作品で映画化もされているが、主人公と義母のすれ違い（これは年代による違いで、必然的に起こるのだが、時がたつと主人公にも義母の気持ちがよくわかってくるのだ。）が特異な設定の中でよく生かされている。また、同じく映画化された『ミッドナイト・バス』（主人公は大企業を退職して深夜バスの運転手になった男だ）では、「家族のすれ違い」というものが徹底して描かれる。しかし、それは誰かが悪いということではなく、それぞれに与えられた時間（人生の残り時間という方が正確か）の違いによって必然的に起こるもので、それを癒やしていくのもまた「時」なのだ、としみじみと感じさせて物語は終わる。

伊吹の作品で筆者が最も好きなのは『なでしこ物語』という作品だ。天竜川の源流にある峰生（みねお）の里の旧家で展開される物語は大河小説の様相を呈しており、既に続編の『天の花』と『地の星』（天の花は星で、地の星は花だというわけ）が世に出ているが、更に続編が連載中であるようだ。

面白くてページを繰る手が止まらないというのは筆者にとっても久々の経験だった。足女生にも是非手にとってほしい本である。

# 足女生に是非とも読んでほしい小説

## 図書館係 阿部健治

6月14日に1・2年生に向けての「性に関する講演会」があった。赤ちゃんが生まれてくる映像を見ながら筆者が思ったのは、「足女生に辻村深月の『朝が来る』を読ませたい」ということだった。

この小説は辻村の代表作の一つで2015刊。第13回(2016)本屋大賞で第5位となった。この年にはフジテレビ系列でドラマ化もされたらしいが、昨年、河瀬直美監督(この人の映像の美しさは特筆もの。樹木希林の遺作の一つ『あん』も素晴らしかった。)の手で映画化された。それをみたばかりということもあって、冒頭の感想を抱いたわけだ。図書係としては小説も読んでほしいが、この映画も是非見てほしいと思う。

この小説には「朝斗」という幼稚園年長組の男の子が登場するが、彼には二人のお母さんがいた。一緒に暮らす「佐都子ママ(映画では永作博美)」と「広島のお母ちゃん」だ。実は「朝斗」は「佐都子ママ」とその夫が「特別養子縁組」(生んでも事情があって育てられない子を、育てたい夫婦が養子としてもらい受ける制度)で迎えた子どもだった。佐都子夫婦は何年にもわたって不妊治療をしていた(筆者はこの小説で初めて知ったのだが、不妊治療って本当に大変。)が、ついに断念しようという矢先にニュースでこの制度のことを知り、結果的に「朝斗」をもらい受けることになったのだった。

「広島のお母ちゃん」は「朝斗」の実母だが、彼女が「朝斗」を生んだのは中学二年生の時。中学一年生で妊娠してしまったのだが、知識も乏しく、気づいた時にはすでに中絶もできない時期になっていた。彼女は「ひかり」というのだが、「ひかり(映画では「蒔田彩珠=まきたあじゅ」という女優が演じている。素晴らしい演技だった。)」の両親も、相手である同級生の「巧」も、更にその両親も出産を周囲に知られることを恐れたため、前述した「特別養子縁組」を仲介する団体「ベビーバトン」に彼女を託すことにした。その結果、「ひかり」は故郷を離れ、広島の小島にある「ベビーバトン」の施設で出産したのである。

故郷に戻った「ひかり」は普通に高校生になったが、事なかれ主義で表面ばかり取り繕っている母親に嫌気がさし(もともと巧と付き合ったのも親への反発からだった)、高校二年生の時に家出をしてしまう。彼女が向かったのは広島だった。「人知れず望まれない子を産む」という「特別な経験」を共にした仲間や、その苦勞を知る「ベビーバトン」代表の浅見(映画では浅田美代子)と一緒に過ごしたいと思ったのだ。

「ひかり」は浅見に温かく迎えられるが、ずっとここで働きたいという彼女の望みは叶えられなかった。浅見は「ベビーバトン」の活動を近々停止しようと考えていたのだ。このような活動にトラブルはつきものだし、経営上の問題も多々ありそうだ。世の中とはそういうものなのだ。

「ひかり」は親にも告げず、首都圏に出て、新聞配達などをして自活しようと試みる。しかし、高校中退の女の子が誰の助けも得ないで生きていけるほど、都会の生活は甘くない。「ひかり」は唯一の仲間だと思っていた同僚の少女に騙され借金を背負わされてしまう。そしてぼろぼろになって、佐都子夫妻の前に姿を現すのだ。

このあたり少しだけミステリーの匂いがあるが、これはあくまで匂いだけのものだ。この後どうなるか、「朝が来る」(「朝が来た」ではない)という題名に含めた寓意も合わせて、この小説の読者自身に確かめてほしい。

辻村深月の作品をもう一つ薦めたい。それは『鳥はぼくらと』という作品だ。第11回(2014)本屋大賞第3位。先月号で「高校生小説」の傑作(覚えてますか。ナンバー1は**恩田陸『夜のピクニック』**ですよ!)をいくつか紹介したが、これが漏れていたことを思い出したのだ。この小説には「**地域活性デザイナー**」という肩書きを持つ「谷川ヨシノ」という人物が登場するが、筆者はこの「地域活性デザイナー」という仕事の特異性に目を瞠った。「谷川ヨシノ」は辻村の他の作品『**青空と逃げる**』や『**傲慢と善良**』(これらも読み応え十分の作品だ)にも登場する、作者お気に入りのキャラクターである。

(話は急に飛ぶが)中島みゆきに『誕生』という曲がある。

中島みゆきというと、『時代』や『地上の星』や、近年は『糸』という曲が特によく知られていると思うが、筆者は数ある中島の名曲の中で『誕生』がナンバー1だと思っている(ちなみに筆者は中島のデビューの頃からのファンで、みゆきファンの生態はわかっているつもりなので、それなりの覚悟は決めてこの発言をしている)ので、皆さんにもこの曲を是非聴いてみてほしいと思う(中島みゆき自身が歌唱しているのは難しいかもしれないが、多くの人がカバーしているので内容ならすぐに確認できるだろう。ちなみに合唱版もあるようで、どこかの中学校で卒業の歌として歌っているなどというのもあった。)

この曲はもとは中島みゆきが工藤静香(キムタクの奥さん)に提供した歌で、最近、NHK-B Sの音楽番組で工藤が歌っているのを久々に聴いたが、歌って戻ってきた工藤が聞き手のリリーフランキーに「とにかく泣かないように気をつけた」と言いながら涙ぐんでいたのが印象的だった。リリーフランキーも話しながら少し涙ぐんでいた。それほど曲である。

人は思春期になると誰でも自意識が強くなり、必然的に傷つく。自分には何の価値もない、などと思ってしまうものだ。そういう人に中島みゆきは語りかける。「Remember 生まれた時」と。

無用感にさいなまれるのは、思春期の君たちに限らない。むしろ、人に迷惑をかける(可能性が高い)老人ならもっとそうだ。しかし、今はそんな存在になり果てたとしても、誰でも生まれた時は、親の、祖父母の、期待を一身に受けて生まれてきたはずだ。だから「だれでも言われた筈」と中島みゆきは言う。そして、「耳をすまして思い出して 最初に聞いた Welcome」と続けるのだ。

人は皆、人の期待に包まれて生まれてくる。人が生まれるというのは本当に特別なことだ。それは奇跡だとも言える。それを決して忘れな。そして、それでももし、忘れそうになったら、「思い出して!」と中島みゆきは歌っているのだ。

# 要注目！ 小川糸の『ライオンのおやつ』

図書館係 阿部健治

今、BSNHKで毎週日曜日の夜 10 時から『**ライオンのおやつ**』というドラマが放映されている（全8回で7月11日が第3回だった）。このドラマ枠は見応えのあるものが多く（以前紹介した**伊吹有喜の『カンパニー』**もこの枠だった）、今回はちょっと気になっていた小川糸原作の作品だったので、録画して丁寧に見ている。

ドラマを見ながら、原作も読み始め、同時に小川糸の原点とも言える『**食堂かたつむり**』も読み（先行して読み、読了した。）、さらに平行して『**ツバキ文具店**』（これも代表作の一つらしいので）も読んでいるところだ。小川糸は 2017 に『ツバキ文具店』、2018 にその続編である『**キラキラ共和国**』が本屋大賞にノミネート（それぞれ4位・10位だった）され、1年おいた 2019 にはこの『ライオンのおやつ』が本屋大賞で第2位に輝いた。

このように躍進著しかつたのに、なぜ今まで読まなかったのか。自分でも不思議なのだが、つらつら考えてみると、それは次の2点に収斂されるようだ。

①小川糸と言う名前が、第1回本屋大賞（『**博士の愛した数式**』2004）の**小川洋子**と似ていたということ。

作品の内容とは全く関係ないはずなのに、よく知る作家と名前が似ていると戸惑うことはけっこうある。本屋大賞の常連に**柚木麻子**という人（『**本屋さんのダイアナ**』『**ランチのアッコちゃん**』で本屋大賞ノミネート、『**ナイルパーチの女子会**』で高校生直木賞を受賞。『**ナイルパーチの女子会**』は今年、BS テレビ東京土曜ドラマ、水川あさみ主演で放映）がいたが、その後、**柚月裕子**という作家（『**盤上の向日葵**』で 2018 本屋大賞第2位。この作品も千葉雄大主演、BSNHK日曜10時枠でドラマ化）が出現して、筆者は大いに混乱したのだった。

②『**食堂かたつむり**』『**ツバキ文具店**』『**キラキラ共和国**』『**ライオンのおやつ**』等の題名から、文章は達者だろうが、結局は（ありきたりの）「ほのぼの、心温まる系」の作家ではないか、と思い込んでしまったこと。

イメージとしては、キャラクターさえ決まってしまうと、いくらでも話は書ける（『**サザエさん**』みたいな）というタイプの作品かと思ってしまったのだ。しかし、これは全く外れていた。むしろ、小川糸の作品は、**一作一作に込められたエネルギーが桁違いに大きい**のだ。

『**ライオンのおやつ**』は、主人公の海野雫（しずく）が 30 代前半で治癒不能の病に冒され、瀬戸内海の島にあるホスピス「**ライオンの家**」に入るという話である。「**ライオンの家**」では、日曜日に入所者の誰かの思い出のおやつを食べる

催しがあるのだが、これが題名の由来になっている。この設定は、どの作品でも「食べることは生きることだ」と感じさせてくれる小川糸ならではのものだが、流石に目の付け所が違っていると感心させられた。もともと「おやつ」とは、三度の食事とは目的が異なる、特別なものだ。だから、この催しは、このホスピスに入っている誰かの、今まで生きてきた中での**最も特別な経験**を、**味覚（いや、実は嗅覚や視覚も含めた総合的なものだ）**を通して、一同が**共有する**という時間なのである。そこにいるのは、全て死を意識している人たちである。日曜が来るごとに他者の特別な経験を共有し続け、いずれ自分の番が巡ってきて自分の特別な経験をそこにいる全ての人たちが知ってくれることになる。死を間近にする者たちにとって、これ以上貴重な時間などあるだろうか。

日本においては、医療の対象は治癒の見込みのある者だけで、治癒不能となった瞬間にその対象外にはじき出される。それを救おうとするのがホスピスだが、そういう場所でも、ここまで死にゆく人たちへのリスペクトが存在しているか、甚だ心許ない気がする。この本を読んで、「**人の尊厳を守る**」とはこういうことなのだ、と本当に感心させられた。

ドラマ『**ライオンのおやつ**』の方は岡田恵和（おかだよしかず）という人（最近のドラマでは『**姉ちゃんの恋人**』『**にじいろカルテ**』がよかった。「人と人の絆」に焦点を絞り、それを思いがけない形で映像化する人だ）が脚本を手がけている。登場人物（とそのキャラクター）は原作と変わらないが、そこで起こる事件は微妙に変えている。今、原作を読みながら見ているのだが、この違いにそれぞれの意図が窺えて面白い。ドラマと本の両方を同時平行的に鑑賞するのは案外難しい（だいたい本の方が先に出るので、ドラマが放映される時には本の細部を忘れてしまっていることが多い）ことで、その意味でも今回は特別な（「儲けもの」というような）感じがある。

主人公の海野雫を演じているのは土村芳（つちむらかほ）という女優さんで、朝ドラなどにも出ていたらしいが、筆者は初めて見た。ちょっとした表情の変化で内心を表現したりするシーンが多く、難しい役だと思うが、自然で素直な感じがしてとてもいいと思う。「**ライオンの家**」を主宰するマドンナ（かなりの年配なのにいつもメイド服を着ている）役の鈴木京香は言うまでもなく素晴らしい。こういう人に看取られて死んでゆけるなら恐怖も少しは軽減するだろうな、と心からそう思った。もう3回放送されてしまっているが、設定はわかりやすいので、途中からでも無理なく入っていけると思う。絶対見た方がいい、と取りあえずお薦めしておく。

原作の方では、雫の心の移りゆきが細やかに濃密に（古典語の「こまやかなり」は「濃やかなり」と書き、「細やかだ」の他に「濃い」という意味がある。実は両者は同義なのだ）描かれる。こういうところはドラマで描くのはたいへん難しく、文章という形式だからこそより良く描けるのだ。

死（死ぬまでは生きているので必然的に「生」もだが）とは自然のプロセスであるから、自分でその時を決めることはできず、私たちは静かにその訪れを待つしかないという小川糸の哲学も、書物だからこそ、（ドラマよりも）より深く伝わってくる。こういうことが心に響いてくるのが読書の喜びだと思う。足女生にも是非この喜びを味わってほしいと願っている。

# いちばん好きなのは、原田マハ

## 図書館係 阿部健治

松竹の100周年記念映画『**キネマの神様**』が8月から公開されている。これは、近いところでは『**家族はつらいよ**』シリーズ（全3作）で知られる山田洋次監督（もちろん、私たちの世代には「フーテンの寅さん」を主人公とする『**男はつらいよ**』シリーズ（全50作。「一人の俳優（渥美清）が演じた最も長い映画シリーズ」としてギネスブックにも登録されている。）の方が身近だが、その山田洋次監督の89作目の作品だとか。山田洋次は今年89歳だからゴルフ流に言うなら「エージシュート」とも言える偉業である。

この映画は本来、去年公開するはずだったのが、コロナ禍により延期されたのだが、そのみならず、この映画で初主演となるはずだった「志村けん」がコロナウィルス感染症で亡くなり、急遽主演が「沢田研二」に代わるという前代未聞のできごとが起きた（キャラが全然違うような気もするが、それでもまた違った味で映画が成立するのがおもしろいところだ。）。

この『キネマの神様』の原作が**原田マハ**で、主人公「ゴウ」（「円山郷直（まるやまさとなお）」という名前からそう呼ばれた）は彼女の父がモデル。作者の思い入れの強い半自伝的な小説なのである。原作の大筋は以下のようなものだ。

「ゴウ」は映画が好きで、親友とも言える「テラシン（寺林新太郎）」が経営する名画座（配給会社の意向でなく、館主が選んだ映画を上映するタイプの映画館）に通い詰める老人なのだが、同時に「ギャンブル依存症」でもあって、借金が絶えないという困り者なのであった。娘の「歩（あゆみ）」（作品はこの人の視点で進行する）は大企業の課長であり、「ゴウ」の自慢の種だったのだが、シネコンを作るというプロジェクトで社内抗争に巻き込まれ、退職してしまう。それで、父の影響もあって好きだった映画評論で何とか食いつなぐという境遇になったのだった。歩は父にも好きな映画の力で立ち直ってほしいと願い、ブログに映画評論を書かせることにした。すると、仮名（「ローズバッド」）ながら映画評論の大家と思われるアメリカ人からの反応があり、二人はブログ上で論戦を戦わせることになる。この論戦は話題になり、アクセス数はうなぎ上りに増えた。その頃、テラシンの名画座はシネコンに押され廃業の危機に陥っていたのだが、これもゴウがブログで存続を呼びかけたため、再び人気になるという大成果も挙げた。このように順風満帆の展開だったのだが、突然「ローズバッド」からの反応がなくなってしまう。実は彼は癌に冒されていたのだ。「ゴウ」はお金をかき集めて何とかアメリカに飛ぼうとするが……。

小説『キネマの神様』が発表されたのは2008年。13年も前の話なのに、既にSNSの大きな力を認識し、作品に生かしている原田マハの先進性には驚かされる。同時にこの物語は、より本質的には「人を動かし、幸せにするのは人と人との絆しかない」ということを恐ろしいほど雄弁に語っている。作中で「ゴウ」は「人生はすべて映画が教えてくれた」と繰り返す。映画を見るということはその映画を作った人と絆を結ぶことだ。そして、映画を見た人同士で熱き論戦を交わすこともまた、人と絆を結ぶこと。それがかけがえのないものに育っていく過程をこの物語は描いているのだ。

筆者より10歳くらい年上の、いわゆる「団塊の世代」より上の人たちは映画以外に楽しみがなかった（筆者などはまさに「テレビ」世代。過剰なスポンサー

への付度など、問題点も十分感じてはいるが、それでもテレビが好きなのだ）。『キネマの神様』を読んで、そうした世代の「映画愛」が強く胸に響いた。死を目の前にした「ローズバッド」は、「自分が一番高く評価する映画を教えてやるから」と言って、「ゴウ」をアメリカに呼び寄せようとするのだ。

この映画が何かは本文の中で暗示される。筆者もそこからいろいろと調べて作品を突き止めた（有名なイタリア映画だ。皆さんも原田の小説を読み、その映画を是非見てみて。）。そこでは、その時代、そのイタリアの村にとって、「映画」がどれほど魅力的なものだったか、それが余すところなく描かれていた。

原田マハは有名な美術館のキュレーター（展覧会の企画を立て、豊富な知識と交渉力によってそれを実現させる仕事）を歴任した人で、その経験を元にしたアートフィクション（ピカソを描いた『暗幕のゲルニカ』やルソーを描いた『楽園のカンヴァス』、俵屋宗達を描いた『風神雷神』他多数ある）は他の追従を許さない。これらのすばらしさは言うまでもないことで、筆者も最初に読んだのは『楽園のカンヴァス』だった。しかし、原田マハの魅力はここにとどまらない。日本版ヘレンケラー物語とも言える、『奇跡の人』は、津軽という土地、明治という時代の人間をこの上なく見事に描いていて、本当に感心した。「津軽三味線」は、盲目の人を生かすために生まれたのだ。その音色には「魂の響き」を感じるが、これは津軽の人たちの思いやりと知恵が生み出したものだったのだ。

「業が深い」としか言い様がないことを次々にしてしまう「人間」だが、それを知っているからこそ、補い合い、寄り添うことができる。そういう、深いところでの「人間」への寛容さというものが原田マハの作品にはある。また、ケセラセラ、なるようになるという楽天性も感じられて、筆者は原田マハが好きなのだ。

映画『キネマの神様』には、原作にはない若き日の「ゴウ」と「テラシン」の物語がある。そこでは親友である二人と「ゴウ」の妻になる「淑子」（よしこ）はいわゆる三角関係である。この時の「ゴウ」を菅田将暉が、「淑子」を永野芽郁が、「テラシン」を野田洋次郎（知らない役者だと思ったら、有名なバンドのボーカルだとか）が演じている。若者たちを描くことの映画制作上の必要性はわかるものの、かなり大きな変更なので、原作使用許諾を申し入れるときには、流石の山田洋次も原田の怒りに遭うのではないかと緊張したらしい。ところが原田は、「大きな変更です。しかし見事な変更です。」と言って使用を快諾し（ここまでなら他にもあるだろうが）、その後、日ならずして、映画の内容をもとにした『キネマの神様ディレクターズ・カット（版）』まで描いてしまったのだ！何というきっぷのよさ。流石は原田マハである。

傑作が目白押しの原田作品だが、筆者のベスト1はデビュー作である『カフーを待ちわびて』である。沖縄与那喜島に住む友寄明青（ともよせあきお）は祖母と二人暮らしで雑貨屋をやっていたがその祖母も亡くなってしまった。彼は北陸に旅行した際、ある神社に「嫁に来ないか」と書いた絵馬を捧げた。すると、返事があり、実際に美しい女がやってくる。彼にとってはまさに神が運んできたカフー（果報）であった。しかし、もちろん、それには理由があった。はてその理由とは……。

沖縄の離島の生活も本当に目に浮かぶように書かれていて、本当に「清新」という言葉がぴったりの作品だ。この作品は第1回の「ラブストーリー大賞」受賞作でもある。そう聞いて甘っちょろい恋愛小説かと思いき、遠ざけていたのだが、原田の他の作品を読んだ経験から、そんなものであるはずがないと思いき、読む気になれて本当によかった。2年生諸君は修学旅行で沖縄へは行けなくなって残念だったが、せめて本の中で沖縄気分を満喫してみたらどうだろうか。

# 『論語』ってやっぱりすごい

## 図書館係 阿部健治

いつもは「読書のすすめ」のようなことを書くこの欄だが、今月はちょっと趣向を変えて、今年度のNHK大河ドラマの主人公渋沢栄一について書いてみよう。渋沢は2024年度には、福沢諭吉の後を継いで「一万円札の顔」になる予定で、ドラマではイケメンの吉沢亮が演じている（彼は渋沢についてもよく勉強していて堂々たる演技。若いのに本当に立派。）「時の人」だ。大河ドラマ、いつもは観ないけど今年は観てる、なんて人がいたら、その人は本当にラッキーだ。偉人渋沢を知ることでもできて一挙両得だ。

渋沢は江戸時代も末期の1840年、埼玉県深谷市（といっても市の最北で、利根川を渡って向こう岸はもう群馬県の「血洗島(ちあらいじま。すごい地名だ!)」という所。渋沢の言葉遣いも筆者には懐かしい群馬弁だ。)の豪農の家に生まれた。そして、この時代の若者の常として「攘夷思想」に染まるが、不思議な運命の成り行きで、打倒するはずだった「一橋慶喜(後の十五代将軍徳川慶喜)」に仕えることになる。ここで頭角を現した渋沢は、パリ万博に派遣された慶喜の弟昭武(本来の目的は幕府がフランスに借金するための渡仏だったらしい)の随行員となったが、その間に日本では維新が進行し、幕府が薩長軍に倒されて明治新政府ができていた。

帰国後の渋沢は旧主慶喜が蟄居していた静岡を訪れ、そこで旧幕臣と地元の商人を結びつけ、今風に言えば「静岡モデル」を作り上げて大成功を収めた。しかし、これを伝え聞いた明治新政府は早速、「できる人」である渋沢を招聘する。ここで大見得を切り、誘いを断って帰ろう(何しろ旧主慶喜を貶めたにつつき薩長政府ですからね)とした渋沢だったが、大隈重信(早稲田を作ったあの人ですよ)に説得され、明治新政府の役人になるのである。

ここで彼が手がけたのが全国規模の測量、度量衡の統一、貨幣制度改革及び租税法の改正(江戸時代は米がすべての基準で租税は物納だった。これを全て金納にするのだから本当に大変だったろう。)、鉄道敷設、及びそれを用いた郵便制度の確立(当時は郵便という言葉さえなく、それまでは飛脚だったわけだから、これまた大変さが想像できる。)などだった。いかに草創期とは言え、その慧眼(本質を鋭く見抜く力)と実行力は驚異的だ。この業績が正当に評価されれば、彼は早晚国の代表者になってもおかしくなかった。しかし、政治には自ずからこれとは別の面がある。時の権力者大久保利通とぶつかった渋沢は井上馨とともに辞職するのだが、これは政府に不満を持ったからというだけではなかった。

渋沢は政治主導の施策では社会は活性化せず、広く民業を興すようにしないと社会は発展しないと考えていた。官から民に下りた渋沢は第一国立銀行を始めとして、製紙・紡績・鉄道・郵船・電気・ガスと、社会のインフラになる分野で新会社を次々と設立。彼が関わった会社は500を数えるとも言われる。これらの業績により、渋沢は「日本資本主義の父」と呼ばれるようになるのである。

しかし、この「日本資本主義の父」という呼称は渋沢にとっては不本意だったのではないかと筆者は思う。「資本主義」は「capitalism」の訳語で、「ものを自由に売買してよい」社会体制を指すが、それは同時に「資本(としての生産手段)を私有する資本家が、労働者から労働力を買い、それを上回る価値のある商品を生産し、利潤を得る」という構造を生み出す。ここから「労働力の搾取」という大問題が起ころるのはマルクスが「資本論」で指摘した通りである。

渋沢は数々の企業を興していくときに、必要な元手(資本)を多くの人々に出資させるという手法を採った。彼はこれを「合本(多くの人から集めたものを合わせて資本=元手とする)」と呼んだ。だからたぶん、渋沢は内心では自分が推し進めているのは資本主義ではなく「**合本主義**」だと思っていたはずである。

例えば、彼の最初の大事業である第一国立銀行の設立にしても、単独の勢力には受け持たせず、当時の二大勢力であった「三井組」と「小野組」に共同出資・運営させることにこだわった。一つの勢力にやらせた方が運営は楽だが、わざとライバルである二大勢力に受け持たせ、力を合わせて社会を支えるという責任感を植え付けようとしたのである。彼が手がけた500もの企業にしても、経営が軌道に乗ると有能な者に任せて速やかに自分はそこから手を引いていった。

ドラマでは、この後、岩崎弥太郎率いる三菱グループとの角逐が繰り広げられることになるが、渋沢がその気になれば、三菱グループ以上の大財閥を形成することはそれほど難しくなかったに違いない。しかし、渋沢は財閥を作ろうとしなかった。渋沢には「私利」という発想がなかった。「金」は事業を行って社会を豊かにした後の残りかすだと言っているが、正にその通りに生きたのだ。

渋沢は女子教育にも力を入れ、日本女子大学の創立に携わり、第3代の学長にもなった。文化事業にも力を入れ、帝国劇場を作ったりもしたが、特筆すべきは彼の社会福祉や慈善活動(1923、関東大震災の時には83歳で「大震災善後会」の副会長を務めた)である。それらは総計すると600にも上ったという。

これらの延長線上にあるのが、渋沢が晩年、心血を注いだ「日米友好」のための活動である。渋沢は1902(明治35)年62歳の時に欧米を視察し、アメリカのルーズベルト大統領と会見している。これを皮切りに1909年にはアメリカの60都市を訪問、1915年にはやはり渡米してウィルソン大統領と会見、翌年、76歳で実業界から身を引くが、1921年(81歳)には排日運動改善のため高齢をおして渡米、ハーディング大統領と会見している。この頃、日米関係はかなりきな臭くなっており、これが太平洋戦争に繋がっていくのである。更に1926年から1930年(この年渋沢は90歳、翌年には死去する)までは第一次世界大戦終結日である11月11日には毎年ラジオ放送で平和を訴える演説をしている。

これらの功績が評価されて、渋沢は1926,1927と2年続けてノーベル平和賞候補にもなっている。ノーベル賞は欧米中心の傾向があり(アジアの国のことはヨーロッパには伝わりづらかった)、受賞には至らなかったが、その業績が正当に評価されれば受賞の価値は十分あったと筆者は思う。

渋沢がこれほど、社会のため、民衆のために励んだのは、若き日に「論語」を熟読し、その精髓である「民を大切にする」という孔子の社会思想を深く身に刻みつけたからである。怠け者の筆者などには、「論語」の教えは峻厳すぎて時に教条的にも思えてしまうが、渋沢は粘り強くこれを実践し続けたのである。

2500年も前に生まれた孔子の思想の素晴らしさが「商い」の神髄をも会得した(少年の頃から藍玉の行商などで身につけた)渋沢によって体現され、更に輝かしさを増したということには感動を禁じ得ない。

本年7月、五輪の開会式で来日したアルメニアのアルメン・サルキシャン大統領が渋沢史料館を訪れ、「国の恩人だ」として感謝のメダルを贈ったという。約100年前、オスマン帝国(現在のトルコ)に迫害された難民のために多額の寄付金を集め、届けたことのお礼だそうだ。「後世に残る仕事」とは正にこういうものだろう。

渋沢が語ったことは『論語と算盤』(角川ソフィア文庫)という本にまとめられている。学校図書館で今年購入したこの本の後付けを見ると、初版発行が平成20年で、令和2年1月時点(10年程)で39刷になっている。もとは1927(昭和2)年刊のこの本、100年近くたった書物が今日これだけ読まれていることには改めて驚かされた。齋藤孝明治大教授の解説による『図解 渋沢栄一と「論語と算盤」』も図書館にはあるので是非読んでみられたい。

# 医療小説に新しい風を吹き込む

——— 今、注目の作家 南杏子

## 図書館係 阿部健治

医師で作家という、森鷗外をはじめとして実に数多くの例があるが、医療の世界を描いたものと限定しても、久坂部羊や夏川草介、ミステリなら海堂尊や知念実希人など相当に数が多い。テレビドラマでは『コウノドリ』や『医龍』など、刑事物と双璧をなすような題材だから、私たちはこうしたものを通して、医療現場には相当に馴染んでいる（筆者はかつて人が注射されている映像を見るのもいやだったが、最近では心臓手術の現場などを見せられても何も感じなくなった。「慣れ」というのはすばらしいものだ）。

このように、小説としても、既に書き古された感さえある医療の世界だが、南杏子の作品に触れると「なるほど、本当はそうだよなあ。」と思わせられる場面が実に多く、「病」や「老い」という人間の業（ごう）とそれに関わる「医療」という世界の奥深さには改めて驚かされる。医療の現場には、建て前だけでは収めきれない「人間のホント」が否が応でも顔を出す。南杏子の目はそこにまっすぐに注がれているのだ。

まず、紹介したいのはごく最近刊行された『ヴァイタル・サイン』という作品である。この作品は一口に言えば、「看護師の日常」をくまなく描いたもの、ということになる。そのどこが新しいの？と言われそうだが、「活躍する看護師」ならドラマでも何度も見てきたが、「看護師という仕事の過酷さ」をここまでリアルに描いたものは今までになかった（少なくとも筆者の目には触れなかった）。本校には看護師を志望する生徒が数多くいるが、こんな過酷な仕事、本当にやっていけるのだろうか、本書を読んで筆者は心の底から心配になった（医療系を志望する人は是非この本を読んでみて下さい）。

ではどんなところが大変なのか。次に掲げてみよう。

看護師には、まず患者のヴァイタル・サイン（脈拍・血圧・体温・呼吸数・意識状態）を一定時間ごとに記録するという「柱」となる仕事がある（これが題名の由来だ）。しかし、その他に医師からの指示による仕事（薬品の準備や投与＝注射・点滴など。患者の家族への一次的対応、クレーム処理などもある。）、食事・トイレ・入浴の介助（必要としない患者もいるが、入院患者は高齢の人が多く必要な人が多い。これが本当に大変。）やナースコールへの対応、死者が出れば遺体をきれいに整える作業（これを「エンゼルケア」という。作中の病院は死亡退院が7割という設定だ。）等がある。時としてこれらがいつべんにやってくる。そういう時の病院はまさに戦場である。

加えて、この病院（「二子玉川グレース病院」という名前だ。）は日勤（午前9時～午後5時、実際には1時間半前の出勤は不文律、更に午後8時くらいまでの残業は当たり前ということらしい。）、準夜勤（午後5時～午前1時）、深夜勤（午前1時～午前9時）の3交代制で、毎日入れ替わる。例えば主人公のある月の最初の1週間のシフトは「日勤ー深夜勤ー準夜勤ー休みー日勤ー深夜勤ー休み」である。一応週休2日ではあるが、これでは毎日の生活リズムは確立しようがない。こういう過酷な勤務だと急に辞める人も少なくないので、そうなるとすぐには補充できなくてシフトは更に厳しくなるというオマケつきだ。

どうだろう。やっていける自信はあるだろうか。

入院患者は高齢者が多いので、入浴の介助は大変で、嫌がった患者にものを投げつけられ顔に傷を負うという場面もある。入浴させるときは1人25分で補助員と2人がかりで5人くらい続けて入れるらしいが、3時間くらいかかり切りで、汗びっしょりになるという。そうした大変な業務の中で、特に筆者の印象に残っ

た場面が二つあるので以下に紹介しよう。

一つはトイレの介助の場面だ。その患者さんは行動が不自由なので、車椅子に乗せるのも大変だが、トイレに連れて行き脱がせるのも大変、そしてようやく便座に座らせても、排便はすぐ済むわけでもない。そういうときにナースコールが鳴るのだ。他の看護師たちに声をかけるが、それぞれ別の患者にかかっており動けない。ナースコールへの対応が遅いというクレームを受けたばかりだったので、仕方なくトイレの患者さんに「そのまま待っていて」と声を掛けてナースコールのあった病室に向かうが、その間に、自分でパンツを履こうとした患者さん（看護師に迷惑掛けまいと頑張ったのだ。）は転倒して頭をぶつけてしまう…。主人公は上司に大目玉をくらうことになるのだ。

もう一つは患者の家族からのクレームだ。ある高齢の患者が誤嚥（食物などが気管に入ってしまうこと。高齢者はこれで亡くなることが多い。）して、その時は回復したのだが、患者の娘が、医学書のようなものを見せ、ここに「口腔ケア（口の中をきれいにしておくこと）をしっかりと行っていれば誤嚥は起こらない」と書いてある。父が誤嚥したのは担当看護師がそれを怠ったからだ、今度そうなら訴える、というのである。

口の中がきれいになっている方が誤嚥がおこりにくいのは真実なのだろう。しかし、どれほどきれいにしても運動機能が衰えている患者が絶対誤嚥しないということがあるだろうか。一生懸命やっているのにこう言われるつらさ、読んでいる方も胸が痛くなった。

この小説、最後には看護師の過酷な労働を解決する糸口が記されていて、ある意味ハッピーエンドに終わるのだが、筆者の胸には簡単には消えない重苦しさ（コロナ流行時、医療従事者が受けた差別や中傷なども思い出した。）が残った。

作者の南杏子は日本女子大学の家政学部被服学科を卒業し、（畑違いの）雑誌編集の仕事に就いたが、25歳で新聞記者の夫と結婚、海外勤務の夫についてイギリスに行き海外での出産を経験した。その後、その子が2歳、本人が33歳の時に一念発起して東海大学の医学部に学士編入、医師となった（勉強は本当に大変だったと思う。）。その後、スイスに行って医療も行ったが、帰国後は東京都内の終末期医療専門病院に内科医として勤務しているということだ。

小説を書くようになったのは、夫と一緒に通い始めた小説教室がきっかけであつたらしい。大学時代に寝たきりの祖父を家で看取った介護体験や医師として多くの死を見届けた経験をもとにして、終末期医療や在宅医療を題材とし、そこにミステリーの味付けをしたデビュー作『サイレント・ブレス』（2016）が出版され、これがかなり評判になった。第2作『ディア・ペイシェント』（2016・（「親愛なる患者さま」の意）はある患者が若い女医のストーカーになる、という意外な設定で、筆者の好きなBS-NHK日曜ドラマ枠でドラマ化された。筆者が南杏子を注目するようになったのは、このドラマを見たからで、ステータスも高く、世間からは羨ましがられる医師という職業にも実は様々なしごきがあるということ的印象的に描き出した秀作であった。

そして、主演に吉永小百合を迎えるということで大きな話題になった映画『いのちの停車場』（2021・5月に公開）の原作（題名は映画と同じ）が今のところ、南杏子の最高の作品と言えるだろうか。東京の大病院の救急救命センターの副院長をしていた60代の女医が故郷の金沢に帰ってきて在宅医療を行うという話である。救急救命医療というのは高度な専門性と意欲と経験が必要な分野で、ドラマ等では「天才外科医もの」と並ぶ医療ドラマの定番だが（かつて、「ER」というロングランのドラマがあった）、実は在宅医も「年を取ったものの片手間仕事」などでは全くなく、救急救命医に匹敵するか、あるいはそれ以上の能力（柔軟性や我慢強いことなど、人間的なものも含めて）が必要とされる分野だということ、強く強く訴えている。

「患者さんのホント」は病室の中にあるのではなく、生活の拠点である家でこそ、家族たちに囲まれてこそ現れるものだ。考えれば当たり前だが、目の当たりにして初めてわかることなのだ。そして南杏子のそれは本当にわかりやすい。彼女の経験と筆力が私たちにとってこの上なく貴重なものだとする所以である。

# 檀一雄のこと

## ——— 足利ゆかりの文豪

### 図書館係 阿部健治

足女生の皆さんは「檀一雄（だんかずお）」という作家を知っているだろうか。1976（昭和51）年に亡くなっている（64歳）から、忘れられがちではあるが、代表作の『火宅の人』（1975・第27回読売文学賞・第8回日本文学大賞受賞。1986年に深作欣二監督によって映画化。緒形拳の演技と松坂慶子の美しさが忘れられない。）を初めとして多くの作品が映画化、ドラマ化（1992年には代表作の一つである『リツ子その愛、その死』（リツ子は檀の最初の妻、結核で亡くなった。）がテレビドラマ化された。主人公を佐藤浩市が演じ、リツ子を今井美樹（名曲「PRIDE」を歌った人。皆さんも聴いたことがあると思う。）が演じた。あの時の佐藤浩市の姿は今でも筆者の脳裏から消えない。）された大作家である。近年では、2016年8月に肺がんが判明し、「余命3か月」の宣告を受けた大林宣彦（尾道三部作で有名）が抗がん剤の治療を受けながら、遺作のつもりで撮った映画『花筐/HANAGATAMI』が記憶に新しい。『花筐』は檀の実質的なデビュー作（1937）だが、大林は映画監督になってすぐにこの脚本を描き上げていたようで、この作品は日本を代表する映画監督が、命を賭けて撮るにふさわしい素材だったということがわかる（大林は2020に亡くなった。）。

このように、檀は文学的な業績もすごいのだが、それ以上に、太宰治の一番の親友だったということで知られている（これは本人には不本意かもしれないが…）。彼らの関係を示すものとして、有名な「熱海事件」というものがあるので次に紹介したい。

1936（昭和11）年、太宰は、11月下旬から熱海温泉へ行き、ある小説を執筆していたが、脱稿した後も熱海にとどまっていた。一方檀は8月から10月末まで満州旅行に行き、日本に帰ってきたばかりの時だった。太宰の妻が檀の所に来て、太宰が金の無心をしてきたので、汽車賃も出すから、金を届けて支払いをして、できるだけ早く連れ戻ってほしいと頼んできた。久しぶりの再会だと喜び勇んで出かけた檀を太宰は歓待し、その勢いで連日どんちゃん騒ぎをして、むしろ借財を増やしてしまった。仕方がないので、太宰は檀を借金のかたとして熱海に残し、帰京して師匠の井伏鱒二や佐藤春夫らに借金を申し込むことになった。一方、熱海に残った檀は、いつまでたっても太宰が現れないのに業を煮やして東京に戻ってみると、太宰は井伏の家で将棋を指していた。檀が怒りをぶつけると、太宰はぼそりと「待つ身が辛いかね、待たせる身が辛いかね。」と言ったという。

無頼派（太宰や檀、坂口安吾、織田作之助らは文学史上こう呼ばれる。要するに「世間から顔を背けて生きた」ということだ。）の面目躍如といったところ（正直、あきれられるしかない。）だが、この話を聞いてピンときた人がいれば（いるかな？）その人の文学的センスは一級品だ。

そう、この話は中学校の教科書にも載っている『**走れメロス**』の**元ネタ**なのだ。

**檀一雄は「セリヌンティウス」**なのである。

それにしても、この滅茶苦茶な現実を、あんなに見事な（太宰の現実を知ってしまうとそう思えなくもなるのだが…）作品に仕立てる太宰の筆力には唖らされる。他の誰にも為し得ない、「水際だった」芸と言えらるだろう（ただし、太宰という人間の胡散臭さ、これだけはどうしても好きになれない…）。

さて、だいぶ前置きが長くなってしまったのだが、この辺で本題に入ろう。

檀一雄と足利の間にはどのようなゆかりがあるのか、ということである。

檀一雄の父参郎は福岡県柳川市の旧家に生まれた（隣は北原白秋の生家だったらしい。若き日、一雄は白秋を耽読した。その影響でか、自ら詩集も作っている。足高の校庭には『虚空象嵌』という詩碑がある。）。参郎は一雄の母となるトミと結婚（参郎30歳、トミ18歳）した後、山梨県都留市の工業試験場に職を得た。1912（明治45）年に一雄もそこで生まれるが、参郎はその後、東京、郷里柳川、弘前と転々と居を変え、1919年になって足利工業学校（現在の県立足利工業高校）で職を得る（それまで一雄は福岡の祖父母の家に預けられていた。）。この時になって、一雄はようやく一家団欒の生活を知ることができた。7歳の一雄は柳原（現けやき）小学校の2年生になった。

ところがこの生活も長くは続かない。一雄の母トミは美しい人だったようで、父参郎は妻が他の男と情を通じているのではないかと常に疑い、嫉妬に駆られたようだ。妻に暴力をふるうことも度々あったらしい。彼女は一雄が4年生の秋に突然出て行ってしまい、結局帰らなかった。一雄の下に三人いた妹たちは幼いため福岡の実家に引き取られ、小学校4年生からは、一雄と父との二人暮らしが始まる。1924年に両親は正式離婚するが、この年一雄は旧制足利中学（現県立足利高等学校）に入学。この後1928（昭和3）年に旧制福岡高校（現在の九州大学）に進学するまで、約7年にわたり、この足利での父との生活は続いていく。

母に甘えることをなし得なかった一雄は、母の中に潜んでいる「女」を憎んだりもしたが、それで己の人生をダメにしてしまうほど彼の精神はヤワではなかった。福岡の母方の実家暮らし（旧家で祖父が絶対君主であり、誰も一雄をかまったりしなかった。）で「自然に親しむ喜び」を見出していた一雄は、足利の自然の中でも生を謳歌した。父と住んでいたのは西宮町にある長林寺（相田みつをゆかりの寺でもある）の離れ（修行者用の宿坊だったらしい）で、学校から帰ると毎日、両崖山中で遊び、飽くことを知らなかった。父は食事を作ることができず、すべて小学生の一雄が作っていたというが、そうした興味から、山中の食べられるキノコ・野草（ワラビとかゼンマイとか）はほとんど試してみたという。楓の幹に傷をつけて甘い樹液をなめ（種類は違うだろうが、メープルシロップも楓の樹液である。）、鳥もちを仕掛けて野鳥を捕った（これは食べるためでなく、なつかせようとしたようだ。）。両崖山中の斜面で野宿したことさえあるらしい。一雄自身、この足利での生活を『私はこの寺に移り住んでから、云ってみれば、**一個の神仙であった**』と答えていかもわからない。』（「じじばばの花」—『来る日 去る日』より）と回想している。

**筆者は檀一雄の人間性が好きだ。**甘ったれで見栄坊の太宰治（しかし作品は最高だ。『斜陽』の文章など他のどの作家にも書けないものだと思う。）よりも、ぐれてはいるが、すべてに潔く、あたたかみのある檀一雄（たとえば、代表作の『火宅の人』を読んでもらえればすぐにわかると思う）の方がずっと好ましく感じるが、そうした人間性が足利の自然の中で育まれたと思うと誇らしくもある（長林寺の裏から両崖山へ登る道は、筆者お気に入りの散歩コースでもある）。

檀一雄は檀ふみ（女優）らにあてた「娘たちへの手紙」の中で次のように言う。

「あらゆる生命は、神から放たれたか、生産する自然力とでもいったような根源の力から生み出されたのか、知らないが、その無限の造物の力によって、まるで、みじめな、それぞれの道化を演じさせられるあんばいに、この地上にほうり出されてある。」（中略）「悲しいけれども、人間は、たったこれだけのものである……、ということをも、まず、知るべきだろう。いや、必ず、知ることになる。」（中略）「まことにみじめではあるが、私たち一人一人に、命という、自分だけで育成可能ななんの汚れもない素材が与えられている。おまえたち一人一人は、その汚れのない一つずつの素材を与えられた、芸術家であり、教育者であり、いってみれば、自分自身の造物主であり、いや、ちっぽけな、哀れな、神ですらあるだろう。なぜなら、おまえたちの命のありようは、おまえたちが選ぶがままであり、おまえたちの命の育成も、おまえたちの育成するがままでからだ。」

どうだろうか。これは檀が自らの娘にあてて書いたものだが、筆者はこれを**すべての娘たちに届けたいもの**だと思っている。

# 檀一雄のこと（その二）

## ————— 足利ゆかりの文豪

### 図書館係 阿部健治

前日も少し触れたが、足利高校には檀一雄の詩碑がある。そこには『虚空象嵌』という詩が刻まれている。「象嵌」というのは、金属の地を彫り込み、そこに別の金属を切って嵌め込む細工物で、刀の鏝や櫛などの名品が数多くある（ネットで画像検索してみても、とても綺麗。）。従って、「虚空象嵌」とは、たぶん、「何もない宙空に美しい模様を描く」という意味だろう。では、何によってそれを描くのか。それはもちろん「**夢想する力**」によってである。

この夢は／白い頁に折りこめ／ああ／この夢も／白い頁に折りこめ  
その頁頁／夢にくらみ／皎皎／皚皚／舞ひのぼるもの／遂に虚空に満つと

若者にとって、やりたいと願うことはすべて未知の、初めてのことである。この若者ならではの特権、「**未知の汚れなさ**」を檀は高らかに謳い上げる。詩中の「皎皎」は白い月光、「皚皚」は一面の雪景色を表す言葉で、ともに「汚れが全くない」ことを表す。漢文には更に「皓皓」という表現もあって（美人を「明眸皓齒」ともいう。この「皓」も汚れなき白だ。）、漢字文化の「表現」への意欲の高さには驚嘆させられるが、檀はこれを利用して「まっさら」であるという若者の特権性を強調しているのだ。無頼派作家ならではの、世をすねた所も多くある檀だが、ここには彼の「人間賛歌」のようなものを筆者は強く感じる。これこそが檀の本質だと思うのだ。この思いは、彼の最晩年、福岡沖の能古島（のこのしま）を「終の棲家（ついですみか）」と定め、そこに向かう際に娘たちに与えた言葉にも色濃く表れている。前日も載せたものだが、その一部を再掲する。

「まことにみじめではあるが、私たち一人一人に、命という、自分だけで育成可能ななんの汚れもない素材が与えられている。おまえたち一人一人は、その汚れのない一つずつの素材を与えられた、芸術家であり、教育者であり、いつてみれば、自分自身の造物主であり、いや、ちっぽけな、哀れな、神ですらあるだろう。」

『虚空象嵌』はこの詩単独の題名であるが、詩集全体の題名でもある。檀にとっては2冊目の著作であり、昭和14年2月（27歳）に出版された。後に無頼派の作家として広く世に知られることになる檀だが、若き日に学んだ学校のメモリアルとしては、これ以上にふさわしいものはないだろう。足女を卒業する3年生も、これから新生足利高校の一員となる1・2年生も、この言葉を胸に深く刻んで、「自分という素材」を丹念に、そして大胆に磨いていってほしいものだ。

この詩碑は、1977（昭和52）年10月に当時の生徒会の発案によって建てられたと聞いている（筆者はこの年の3月に足利高校を卒業したので、これは知らなかった。）。檀一雄は1976（昭和51）年の1月に亡くなっている（64歳）ので、時期としてはごく自然ではある。しかし、高校生の時の自分を思い起こしてみると、果たして檀一雄を知っていたかどうか、甚だ心許ないところなので、どういう経緯で足高生徒会がこれを建てるに至ったのか、少なからず興味をひかれたのである。

これに関連して覚えているのは筆者の足利高校時代の恩師である倉澤昭壽先

生（後に足利女子高校の第21代校長となった方だ）が、足高に檀一雄の母親が訪ねてきたとおっしゃったことだ。

今回、檀一雄について調べていたら、檀の母親である高岩とみが『火宅の母の記』（新潮社）という書物を1978（昭和53）年（この本のもとになった文章は昭和52年10月、雑誌「新潮」に発表。）に出版している。これと倉澤先生の言葉を合わせて考えると、檀の母親の来校は昭和51年か昭和52年の前半で（亡き息子のための文章を書くことが決まり、そのための取材も兼ねて足利に来たのではないか、ということ）、それを受け、更に先生方の口添え等もあって生徒会が詩碑の建立を発議したという事情があったのではないかと、そう考えたのだ。

実はこの文章を書く直前までこの推測に確信めいたものを持っていたのだが、檀一雄の異父妹で笠耐（りゅう・たえ）という人（この人は物理を専攻する大学の先生で、物理教育に貢献した人を讃える国際的な賞を受賞した人だそうだ。）が2014年に出版した『ある昭和の家族―「火宅の人」の母と妹たち』（岩波書店）を読むに至ってギャフンとなった。そこには「檀の母が1981（昭和56）年の初夏に足利高校を訪れ、檀一雄の詩碑と対面した」とはっきり書かれてあるからである。この本の「心の宝物―晩年の母」という章の扉には、詩碑と並んだ檀の母の写真が掲げられてあり（2回目ということも一応は考えられるが…）、とにかく1981年に檀の母が足利高校を訪ねたのは間違いのない事実のようだ。その時に檀の母は檀一雄が好きだったマロニエと久留米つつじを足利高校に贈ったという（マロニエはやはり文豪の堀辰雄から譲られたものだそうだ）。

檀の母は1921（大正10）年9月、一雄が小学校4年生（9歳）のある日に、一雄と二人の妹を残し、前年に生まれた末の妹だけを連れて家を出る。前夜に夫から暴力を受けて（檀の父は嫉妬に駆られて我を忘れたらしい。）母は命の危険さえ感じたようだ。この後、妹たちは九州の実家で育てられることになり、一雄だけが父のもとに残って足利中学卒業（16歳）まで足利で過ごしたのである。檀の父母は1923（大正12）年11月（9月1日に関東大震災があった年）に正式に離婚したが、この時、檀の母とみは30歳。一雄は11歳であった。

檀の母は翌1924年春に高岩勘次郎と再婚する。高岩も再婚で、亡くなった先妻との間に3男1女（長男は檀一雄より2歳年長の14歳、次男は一雄と同年の12歳だった）があった。とみはこの時点で自分の子4人も合わせて8人の子の母親になったのである。更にとみは夫高岩との間に12年間（とみと結婚した時高岩は46歳だったが、1935（昭和10）年には58歳で亡くなってしまう）で4男2女を設けている。結果的にとみは14人の子を育てたのである。

高岩が亡くなったとき、とみは42歳で、一番下の子仁（じん）は生後1か月、その上の耐（たえ。先述した本を書いた人である）は1歳10か月であった。この時、一雄は23歳。一別以来、ずっと母を避けてきた一雄が友人を介して母と会いたいと言ってきたのは1933（昭和8）年、東京帝国大学に入学した翌年の初め頃だから、このときからわずか2年しかたっていない。一雄は小説家として認められかけていたが、まだこの先どうなるかまだわからないという時期であった。しかも昭和10年といえば翌年226事件が起き、日本が戦争に向かっていく時期である。高岩は実業家であったから、それなりに財産はあったと思うが、それが生かせるような時代ではなかった。その中で、とみは福岡郊外に家建て自ら農地を開拓して子どもたちを養ったようである。先述した笠耐の本の帯には「十四人の子どもたちとともに、厳しい時代を明るく生き抜いた母」とあるが、彼女はまさに昭和の「グレートマザー」であった。

そのようなとみにしても、足利の地への思いは格別のものがあったようだ。長林寺の隣の家は自然豊かで一雄にピッタリということで、とみが見つけ出してきたものだそうだ。ずっと離れていた一雄と一緒に暮らせるようになって、楽しい思い出もたくさんあるらしい。だから、足利高校で若き日の一雄の息遣いが感じられるような詩碑を見た感激は一入（ひとしお）のものがあって違いない。

足女生もこの詩碑を見たら、檀一雄の思いとともに、心ならずもいとし息子と離れざるを得なかった母の悲しみにも是非思いを致してほしいと思う。

# 檀一雄のこと（その三）

## ———— 足利ゆかりの文豪

### 図書館係 阿部健治

檀一雄と言えば、その代表作は『火宅の人』である。この作品は檀一雄の遺作でもあり、1975（昭和 50）年 11 月に単行本として出版され、檀は翌年の 1 月 2 日に亡くなった（63 歳）。そして、その年の 2 月には読売文学賞を、6 月には日本文学大賞（新潮社主催：この賞の中で唯一の没後受賞）を受賞した。

しかも、この作品は檀自身を主人公（桂一雄という名前で登場）にした自伝的な小説で、五人の子を持つ作家が家を出て、舞台女優（作中では矢島恵子：実世界では劇団民芸の入江杏子）と同棲（もちろん不倫だ）するという刺激的な内容が現実とも一致していたため、大きな反響を呼び、150 万部を超える大ベストセラーとなった。1979（昭和 54）年には日本テレビでドラマ化され、1986（昭和 61）年には東映で映画化。恵子はドラマで好評だった原田美枝子が引き続いて演じ、映画の方は主人公の母親役（前回詳しく述べた檀の実母高岩とみ）を檀の娘である女優檀ふみが演じる（孫が祖母の役を演じたわけ）という興味深い配役もあって、大評判になったのだった。

この映画の影響か、1987（昭和 62）年には『NHK 特集 命もえつきる時 作家檀一雄の最期』（語り：草野大悟）が放送された。檀は 1975 年になると、肺がんが脊髄にも転移して激痛に悩まされる状態だったが、完成されないままになっていた『火宅の人』（この作品は連作長編で初回第一編「微笑」は 1961（昭和 36）年 9 月に発表、それから断続的に続編が書かれ、第 21 編「骨」は 1971（昭和 46）年 11 月に発表され、そのまま未完となっていた）を口述筆記で完成させようと苦闘する姿を取材したものだ。意識を保つため、痛みを和らげるモルヒネの治療を拒否して作品完成に命をかける作家の情熱に筆者はうたれ、これを録画した（この録画テープは長らく持っていたが、機器が DVD になるに及んで処分した）。もう昔のことなので忘れてしまったが、これをきっかけにして、『火宅の人』を読んだのではなかったかと思う。

「火宅」は足女生徒諸君には耳慣れない言葉だと思うが、仏教の経典（「法華経 譬喩品」）の用語で、「燃え盛る家のように危うさと苦悩に包まれつつも、少しも気づかずに遊びにのめりこんでいる状態」を指す。この題名には檀一雄の「自分は煩惱の火に焼かれ続けている」という思いが込められているのである。

『火宅の人』主人公の作家桂は、次男の次郎が 1955（昭和 30）年 8 月に日本脳炎を発症して重篤な障がいを負ってしまった時からちょうど 1 年後、1956（昭和 31）年 8 月 7 日に、昭和 22 年頃からずっと面倒を見てきた新劇の女優入江杏子と「事ヲ起ス（男女の関係になった）」。ただし、ずっと面倒を見てきたと言っても別に困っていたわけではない。檀は非常に面倒見のいい男なのだ。太宰の処女作品集『晩年』の原稿を預かって出版にこぎつけたのも檀だし、反社会的組織とトラブルって鬱病になっていた坂口安吾を自宅に呼び寄せたのも檀である。檀は郷里（福岡）が近い入江が上京して女優を目指すにあたり、劇団や仕事の世話を焼いたのである。檀は自分の子も 5 人いたが、母の再婚相手の子たちの面倒も見ていたから、多くの人間が家に入出入りするの普通のことであったらしい。その人たちの中には他にも女優の卵はいたようだし、入江も当初は特別の存在ではなかったようだ。しかし、舞台女優を目指す若い娘（昭和 22 年当時 20 歳）が、文学的才能に溢れ、大きくてあたたかみのある檀に憧れを抱くのは当たり前のことだ。この慕情は何年後かには、はちきれんばかりに大きくなり、それに応じて檀の気持ちも高まっていた。それでも、ずっとプレーキをかけたままの檀が、ついにどうにも抗しきれなくなって「事を起し」たのが昭和 31 年の事件だったわけである。この場面、作家は次のように描く。

発病一年、次郎がほとんど決定的な廢人に変わってしまったと云う抜きがたい憤怒。これらの不吉な出来事の連鎖に対する、恐怖と憤怒の入り混じった、甲

高い激昂のなかで、私は久しいこと優柔不断の恋情を抱き続けてきた恵子を、ハッキリと、旅（筆者注：太宰治の文学碑除幕式で青森に行く）に連れ出してしまったのである。誰にも打ち明けることの出来ない自分の憂悶に対して、自分から爆弾を仕掛けるような、狂おしい、無目的な、復讐であったとも云える。しかし、まさか次郎の発病が、恵子の出来事のほんとうの原因であったなどと、ここでためごかしを云おうとするようなつもりはない。情痴である。十年に亘る躊躇逡巡の不決断な恋情の総決算だ。ただ、次郎発病の日をわざわざえらび取るようにして出かけたのは、例によって、自分の運命を顛覆するふうの、私一人の、ひそかな陰謀であったかもわからない。

この除幕式に檀は入江と文芸評論家の野原一夫の三人で行っている。公的行事に新劇女優を伴えば目出つに決まっているが、なぜこんなに見え見えなことをしたのか。入江は檀が没してから 23 年後の 1999（平成 11）年に『檀一雄の光と影一「恵子」からの発信』という本を出版しており、その中でこの時のことを振り返っているが、それによればどうやら檀は入江のことを泉下の太宰に語りかけたようなのだ。これではもう「**純情な無頼派**」とでも呼ぶ他ないではないか。

1948（昭和 23）年に太宰治が死んでから、檀はもう一人の天才作家坂口安吾と特に親しくなった。檀は無頼派のアブナイ作家を放っておけないのである。しかし、その坂口も 1955（昭和 30）年に急逝してしまう（49 歳）。だから入江と事を起した 昭和 31 年には実は檀は大きな喪失状態の中にあっただのかもしれない。筆者は、『火宅の人』を読むと「無頼派が生き残ってしまったらっこうなる」というのを描いた書だと感じることもある。自分だけが残されたという癒やしような孤独感のようなものを感じるのだ。

檀は、自分の特徴は「過剰な体力」だと言う。太宰や安吾は「懊悩の果てに、観念の側から」人間なものかということを手探りで追い上げていくが、それが自分の「過剰な体力放散の狂態」と一見すると似ているだけだと自嘲するのだ。

私は動いていないと静まらない。行先が自分でもわからないから、これを妻君であれ、愛人であれ、一々告げるわけにはゆかぬ。知りたかったら、ついて来たらいいだろうと本気で云っているのだが、一二度珍しがって同行してくる彼女達も、しまいにはあきれてついてこなくなる。

何しろ、檀は思い立つと南氷洋に行く捕鯨船にも乗ってしまうような男（昭和 27 年、40 歳の時に 4 か月かけて行った）なのだ。妻は地味でおとなしい人だから早い時点でギブアップだし、入江は冒険を楽しむ方だがそうどこへでもというわけにもいかない。だから、檀は入江との逃避行を楽しみつつ、子どもたちと川に泳ぎに行ったり、庭木を掘り返して模様替えしたり、自分流の料理をたくさん作って人にふるまったりすることができないとストレスがたまってくる。これを「過剰な体力」というのである。

檀は入江と事を起してから半年は東京のホテルで同居した。家には五人の子がいるし、夫に死なれた母の面倒も見ている。だから檀はとにかく稼がなくてはならない。そこで、この時期、大量の随筆や中間小説を書いていたのである。檀は直木賞を受賞していて大衆小説の書き手のように見られているが、もとは 1936（昭和 11）年に第 2 回芥川賞候補になった（『夕張胡亭塾景觀』）くらいで、純文学を志向していた。だからこそ話題性もあるが、純文学的な趣も備えている『火宅の人』を自らの集大成として書いたということだろう。『火宅の人』はそういう彼なりの必然性をもった作品なのである。

しかし、長年の過酷な執筆活動と酒と煙草の習慣は、結果から言うと、この持て余すほどの「体力自慢」の男の体力を着実に奪っていった。『火宅の人』の中の「諸君はやがて、八十歳の破滅型を見るだろう」という予言はついに実現することはなかったのである。それは残念ではあるが、『火宅の人』という作品が後世に残ったことの意義は限りなく大きいと筆者は思う。

1995（平成 7）年には『檀』という本が出た。これは沢木耕太郎というノンフィクション作家が檀の妻のところに通って話を聞き、妻になりかわって書いたという希有の書である。多くの人の興味をそそり、こんなものを生み出させるというのは優れた文学のみが持つ力である。だから、これを完成させて逝った檀はむしろ本望だったのではなかろうか。筆者にしてもこんな面白いものを残してくれて、魅力的な人柄に触れさせてくれたことには感謝するしかない。そして、こんな駄文を書く機会を長く与えていただいたことにも心から感謝を捧げたい。